
炎の魔法使い

臆病者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の魔法使い

【Nコード】

N4166S

【作者名】

臆病者

【あらすじ】

事故で死んだ青年が家庭教師ヒットマンREBORNの能力をもらい、ネギまの世界へ。この作品は作者の暇つぶしでできています。駄文ですが、よろしくおねがいします。

プロローグ

「目が覚めたか」

しわしわの爺さんの声で俺の意識は覚醒した。周りを見てみるとあたりが真っ白な空間に俺は立っていた。つーかここどこだ？

「ここはあの世の一步手前じゃ」

心を読みやがったよこの爺さん！

「当たり前じゃ。わしは神じゃからな」

へえ〜どーりで。

「お主軽いの〜。もっと驚いたり取り乱したりするものじゃないか？普通」

あいにく俺は非常時は常に落ち着くよう教育されているんでね。ていうか何で俺はこんなところに？

「覚えておらんのか？まあショックが強すぎたのかもな。お主は道で車にひかれそうな子供をかばって死んでしまったのじゃよ」

そついやそうだった。ところで、その子供は無事か？

「多少の擦り傷はあるが大きな怪我はない。」

そうか。よかった。

「自分が死んでなお他人の心配か。やはりお主は見どころがあるの
」

どういう意味だ？

「今時、他人をかばって死んでしまう人間なんていないのでな。そんなお主に興味をもってあの世に行く前にここに留めたのじゃ」

ふん。それで、俺をどうするつもりだ？

「お主ほど魂が高潔な人間はそうはいない。そんなお主にチャンスをやろう思ってたな。お主、もう一度人生をやり直そうとは思わないか？」

やり直す？生き返ることができるのか？

「残念ながらもといた世界には生き返ることはできん。ただし別の世界……異世界になら生き返らせることができる。それもさ
まざまなおまけつきでな」

異世界？それにおまけ？

「うむ、異世界とはお主も読んだことがある漫画、ネギまの世界じや。あの世界は危険が多いからな。そのままじゃとすぐに死んでしまふ。そのためさまざまなおまけ、つまり能力をプレゼントしようかと思つての」

なるほどね。ちなみに能力つてのはいくつまでできるの？

「余程大きな願いじゃないかぎりいくつでもかまわんぞ」

太っ腹だな。じゃあ、家庭教師ヒットマンREBORNから全ての属性の波動とボンゴレX世と守護者全員のVG、さらにリングと匣兵器を作る才能と、自由に超死ぬ気モードになれるようにしてくれ。あとボンゴレの超直感に格闘術と時雨蒼燕流を使えるようにしてきてくれ。

「注文が多いの。まあかまわんが。しかし、なぜリングとボックス兵器を作る必要があるんじゃない？」

俺以外の人間がリングとボックス兵器を使う所をみてみたいからだよ。

「なるほどな。わかった。あと、容姿はどうする？」

もちろん、ボンゴレ？世で。

「わかった。ではお主の注文通りの能力を与えて送ろうかの。では達者でな」

その言葉を最後に俺の意識は闇に落ちた。

第一話

目が覚めると俺は森の中に立っていた。服装は白のワイシャツに上
下紺のスーツにマントといった服装だ。指には大空のV Gがはめら
れている。しかし、他のV Gが見当たらない。傍にかばんが置いて
あったので開けてみると手紙が入っていた。読んでみると

（わしじゃ、神じゃ。この手紙を読んでいるということは、
無事そちらの世界に着いたということじゃな。さて、色々知りた
いことがあると思うじゃろうが今その場所は魔法世界にある森の中
じゃ。時代は原作開始からおよそ20年前、大戦が始まり、紅き翼
が活躍し始める頃じゃ。それと、V Gと時雨金時、それにボンゴレ
？世のマントじゃがさすがに全部つけると不格好になるからの。念
じれば勝手に出てくるようにしておいた。もちろん念じれば消える
からの。ちなみにマントは伸縮自在じゃ。それにリングと匣兵器を
作る材料とボックス兵器の設計図、Xグローブをそこに入れておい
た。足りない分はそちらの世界にもあるから自分で調達してくれ。
じゃあ元気でな）

手紙を読み終えた俺はいろいろと神に感謝しつつ、かばんを持ち、
これからどうしようかと考える。身長やかばんに入っていた手鏡で
自分の姿を見てみるに、俺の年齢はおそらく14、5歳といったと
ころだろう。これからどうしようかと考える。できれば紅き翼と出
会って仲間になるのがベストなんだがな……。と考えていると
遠くから爆発音が聞こえてきた。何だと思い、音がした方へと近寄
っていく。すると、漫画で見たことのある四人が大勢の敵と思われ
る兵士たちに囲まれていた。……………なんというテンプレ。

side ナギ

俺達紅き翼は今辺境で大群の帝国の兵士たちとやりあっている。まったく、何でこんな辺境にまでこんなに大勢いんのかね。

「詠春、アル、お師匠！俺が上級呪文でぶっ飛ばすから、呪文詠唱の時間をかせいでくれ！」

「ああ、わかった」

「わかりました」

「うむ」

三人がそれぞれ返事をして詠唱をしようとしたとき

「X BURNER」

そんなつぶやきが聞こえた瞬間、特大の炎が敵の帝国の兵士たちを吹き飛ばしやがった。声のした方を見ると、そこには俺より少し年上くらいの、額に炎を灯した男が立っていた。

side out

「X BURNER」

俺は超死ぬ気モードになり、ボンゴレX世、沢田綱吉の必殺技、X BURNER を放った。放ったんだが……あきらかにツナより威力がでかい。どのくらいでかいかというと、ツナが放つX BURNERの5倍くらいはでかい。しかも全然疲れていない。一体炎力の最大値をどれだけ大きくしたんだよあの神……と一人愚痴っていると、赤髪の男（おそらくナギと思われる）がこちらに話かけてきた。

「おい、お前何者だ!？」

などとかかなり警戒された様子で言われた。他の三人も同じように警戒している。当然か、あんな馬鹿でかい炎で敵を一掃したのだからさて、いきなり異世界から来ました。なんて言ったら頭がおかしいんじゃないかと疑われるからここは無難に

「何、ただの旅人だよ」

「さっきの炎は魔法か？」

「いや、違う。長くなるから説明は省くが俺の特殊能力だと思ってくれたらいい」

「何故助けた？」

「あきらかにあんた達の方が数が少なくて手こずってるように見えただんでな。それに、俺の直感というか、なんとなくあんた達は悪人に見えなかったんでね」

そう言うと四人は一瞬呆けたあと突然ナギの奴が笑いながら

「ははは、そんな理由で助けたのかよ。お前名前は？」

そう聞かれて俺は困った。前世の名前だとこの容姿では合わないからだ。だからこの容姿のモデルでもある男の名前を答えた。

「ジョット」

「ジョットか。俺はナギ・スプリングフィールドだ。なあジョット、俺達の仲間にならないか？」

「「「ナギ！？」「」」

俺としては願ったりかなったりなんだが

「いいのか？会ったばかりの男を仲間なんかに加えて？」

「いいに決まってるだろ。な、みんな」

「はあ、一度言い出したら聞かないからな、お前は」

「ふふふ、これから面白くなりそうですね。私の名前はアルビレオ・イマ。気軽にアルと呼んでください」

「わしはフィリウス・ゼクトじゃ」

「青山詠春だ。よろしく」

「これからよろしくな、ジョット」

こうして俺は紅き翼の仲間になった。

第二話

あれから数週間、俺達は時々来る帝国からの刺客達を撃退しながらすごしている。

ちなみにあの後、ゼクトとアルに魔法を習ったのだが、二人によると魔力量は一般の魔法使い並だということらしい。アルには

「さすがにそこまでバグではありませんでしたか」

と笑顔で言われた。確かに俺自身そこまでバグだったらどうしようかと思ひ安心したが、他人に言われると少しショックな気もする。しかし、魔法を習得する時間はかなり早いらしく、ギリギリだが上級呪文も使えるようになった。ゼクトには

「バカ弟子より教えがいがあって嬉しいぞ」

と喜んでいた。ナギってそこまで覚えが悪いのか・・・まあんちよこ見ながら呪文唱えてるしなあいつ。

「おゝい、ジヨット、晩飯だぞ」

考え事をしている間に晩飯の時間になったらしい。今日の飯係りは詠春だったな。

「んっふっふっ、こいつが旧世界の日本の鍋料理って奴かあ。じゃ、

早速肉を」

「あつ、ナギおま・・・、何先に肉を入れてるんだよ！」

「トカゲ肉でもうまいのかのう？」

「いや、流石にトカゲ肉はどうかと思うが・・・」

と言つても純日本人である俺にとってはトカゲ肉でも鍋が食べられるのはとても嬉しい。

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ。ホラホラ」

「バ、バカ。火の通る時間差というものがあつてだな・・・」

「あーうつせーぞ、えーしゅん」

「フフ・・・詠春、知ってますよ。貴方のような者を鍋將軍・・・と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーグン！？」

「つ・・・強そうじゃな」

「わかったよ・・・詠春、俺の負けだ」

「全て任す。好きにするがよい」

「んー、うれしくないなー（鍋奉行じゃ・・・？）」

結局、詠春に任せて俺達は鍋に箸をつつく。

「しかしうまくないこの鍋。姫子ちゃんにも食わせてやりたい旨さだな」

「姫子ちゃん？・・・誰のことだ？」

俺は知っているが一応知らないふりしておく。

「オスティアの姫御子のことですよ」

「オスティア？・・・ああ、あの戦争の道具にされているって噂の？」

「ええ。まあ・・・戦が終われば彼女を自由にすることが出来るやも・です」

確かに漫画でしか読んだことがないが、ひどい扱いだったよな。はやく自由にしてやりたい。

「その戦だが・・・どうも不自然に思えてならん」

「何がだ詠春？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろが鳥頭」

そういえばそろそろジャック・ラカンが来るころじゃ・・・来た！

ドカーン！！

詠春以外の三人が飛び散った鍋の中身から肉だけを箸で取った。俺も取ろうとしたが両サイドのアルとゼクトにほとんど取られちゃった……ちくしょう。

などと悔しがっていると崖の上から声が聞こえてきた。

「食事中失礼……俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！いちちょやろうぜッ」

とうとうラカンが登場した。正々堂々正面からくるとは礼儀正しいのかバカなのか……バカなんだろうな。

「何じゃ？あのバカは」

「帝国のってわけじゃなさそうだな。えいしゅ……んお！？」

詠春の奴、頭から鍋を被ってやがる。ご愁傷様。

「フ……フフフフ……食べ物で粗末にするやつは……」

あゝあ。詠春のやつキレてやがるよ。

「どーしたー、来ねーのかあ。来ねーならこっちから……」

シュンッ

「斬る」

詠春とジャック・ラカンの戦いが始まる。

「お？詠春の攻撃を凌いでいるぜ」

「あの大男、ちょっと前に南で話題になった剣闘士ですよ」

「へえ、あつ、詠春の奴色仕掛けで負けた」

まったく、お色気に弱いな、詠春の奴。

「なあ、次俺が行ってもいいか？」

「なんだジョット、いつになく戦いに積極的じゃねえか」

「まあな。あの男の強さがどれくらいのものか気になってな」

「へえ、お前が人の強さを気にするなんてな。まあ俺が行きたいところだが、今回は譲ってやるぜ」

「ありがとう、ナギ」

そんなやりとりをして俺はジャック・ラカンの前に降り立つ。すると

「おつ、出たな情報その5」

5？・・・原作じゃあナギの奴が4だったからイレギュラーである俺は5ってことか。どんな情報なのだろうと気になると

「謎の炎の使い手で、特徴 敵だろうと人は殺さない」

そうなのだ。俺は今まで一度も人を殺したことがない。最初ナギ達と会った時の帝国の兵士たちも、X

BURNERで重傷は負ったものの、命に別状はなかった。あの時が今までの人生で一番あせったかな。

別に人に恨まれたくなくて人を殺さないんじゃない。それが俺の覚悟なのだ。そう決意してからというもの、初めて放ったX BURNERよりも炎の純度が増したように思える。甘い考えでもリングが俺の覚悟に応じてくれたってことか。重要なのは炎の量ではなく純度だと誰かが言ってたしな。紅き翼のみんなにも俺の覚悟を軽蔑されるかと思ったのだが

「はは、ジョットらしくていいじゃねえか」

とナギに笑われてしまった。他のみんなも微笑ましい感じで笑っている。俺の覚悟を否定してくれなくて、めちゃくちゃ嬉しかったなああの時は。

「お前みたいな奴は嫌いじゃないが、倒させてもらっぜ」

「悪いがそうはいかない」

「言ってくれるぜ！ラカンパンチ」

俺はそのパンチを超死ぬ気モードで受け止める。

「うほっ、それが情報にあった炎か。確かに唯の炎じゃなさそうだな」

ラカンはそう言って俺から腕を振り払い、距離をとると

「悪いが、お前を除いてあと三人も残ってるんだ。全力の一撃で終わらせてもらっぜ」

「ならば俺も全力の一撃で答えよう」

俺は構える。

「はっ、おもしれえ。いくぜ、ラカン・インパクト！」

「バーニング・アクセル！」

俺とラカンの拳がぶつかり合う。そして……

「はあっ！」

俺の拳がラカンの拳を弾き飛ばし、顔面に直撃しそのままラカン吹き飛ばす……俺とうとう人殺しちゃったあ！？などと慌ててラカンの様子を見に行くと

「グウ〜」

寝てやがるよ、こいつ。俺はほっと胸をなでおろし、詠春をかついでナギ達の元へと帰る。

「さすがだな、ジョット」

「あの男、寝ているだけだがどうする？」

「ほっという場所を移動して食事の続きをしましょう」

「そうじゃな」

その後、寝ていたラカンが目を覚まし、俺にまた勝負を挑んできたが、ナギがそれを邪魔し、ナギと勝負をし始めて、知らんうちにラカンが紅き翼に入った。

第三話

辺境に追いやられていた紅き翼だが、前線に復帰するときが来た。
あの有名なグレード「ブリッジ奪還作戦だ。

「敵の数も相当なものだな」

「それだけここが重要ってことだろう」

「まあ、俺達がいりや楽勝だぜ」

「いい機会だ。俺は新兵器ためさせてもらおう」

そう言つて俺は苦勞して作った匣兵器を取り出し、開匣する。
使う匣兵器は、「巨雨象」「暴雨鮫」「嵐蛇」「嵐コウモリ」の大
群相手に適した兵器たちだ。

「それがあなたが一人で作っていた兵器ですか。動物を使うとは新
たな発想ですね」

「うむ、しかしお主が使う炎についても説明してほしいものじゃが・
・・」

「すまないが、それについては時期が来たらちゃんと説明する。今
はそれより目の前の戦だ・・・ナギ！」

「ああ・・・それじゃあ、行くぜ野郎共！」

「」「」「」
おう（うむ）（はい）「」「」「」

俺は動物達に戦艦を破壊するよう命令し（兵士を殺さないよう加減している）、俺自身はXグローブで敵を殴り飛ばしたり、時雨金時で敵を斬り裂いたりしていた。

仲間達は俺が剣を使えることに驚いていたが、詠春に後で勝負をしてくれと頼まれた。（ちなみに勝負は互角だった）

そしてグレードⅡブリッジ奪還作戦は連合の勝利で終わった。

ちなみにナギと俺のファンクラブができた。嬉しいような嬉しくないような……。

ナギは自称していた「千の呪文の男」が有名になり、ジャックも「千の刃」と言われるようになった。

俺はというと……「炎の拳闘士」に「蒼炎の剣士」、さらには「炎獣の使い」と言われるようになった。正直めちやくちや恥ずかしい……。

後、ガトウとタカミチが仲間になった。

第四話

俺たちは今ガトウに呼ばれて本国首都にいる。おそらくアリカ姫に会ったためだろう。

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出して」

「会ってほしい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

聞いたことがない声をする。声の主は

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらの方だ」

階段を上り、現れたのは

「ウェスペルタティア王国……アリカ王女」

あれが主人公、ネギの母親か。おっ、ナギの奴見とれてやがる。一目ぼれってやつかな。

ジャックが何か話かけているが

「気安く話しかけるな、下衆が」

と一刀両断。でもジャックのやつ全然気にしていない。

俺も何か話かけようかと思ったが、ジャックと同じようなことを言われたらジャックと違い、めちゃくちゃ傷つくので黙っておいた。

あの後、ジャックのやつにナギがアリカ姫のことだからかわれてる。仲いいな、あいつら。

そして俺達紅き翼は、休暇中「完全なる世界」についての内偵を開始した。

といっても俺とナギとジャックの三人はどう考えても調査には向いていないので、他のメンバーに任せきりにして、ジャックはバカンスを、ナギはアリカ姫と買い物をし、俺はリングと匣の開発に勤しんだ。

時々詠春に調査に参加しろと言われるが、俺は俺で忙しいとかなり自分勝手な理由で断らせてもらった。（その後詠春に小一時間小言を言われた）

偶に俺もジャックと共にバカンスを楽しみ終え、部屋に入ると

「まさか・・・こんな・・・」

「よお、どうしたガトウ、そんな深刻な顔してよ」

「ああ、ラカンにジョット、いや、遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが・・・」

「何か問題でもあるのか？」

「いや、どうも信じがたい内容だな。情報ソースは確かなんだが・
・信じていいんだか悪いんだか・・しかしこれが確かなら奴らの
行動も・・・」

「んだよ、ガトウ。はつきりしねえな。もっとわかり易く言えや」

「いや 言ってもあんたらにや興味の無い話だよ。多分」

あんたらって俺も入っているのか。失礼なやつだな

「それよりもこれを見る。この男にも「完全なる世界」との関連の
疑いが出てきた」

「これは・・今の執政官じゃねーか！このメガロメセンブリアのナ
ンバー2までもが奴らの手先なのか！？」

さすがのジャックでもそのくらいは知ってるんだな。見直したぜ。

「おいジョット、てめえ今失礼なこと考えなかったか？」

「俺がお前にか？考えるわけがないだろう」

「とにかく確証はない。外で喋るなよ」

その時、ズズン！！と爆発音が響いた。

「何だ！？」

「街中だな・・・確かナギとアリカ姫が買い物に出ているはずだ」

「まさか、二人を狙って!？」

「かもな……まあナギの奴がついてるんだ。大丈夫だろう」

「やけに落ち着いているな、ジョット」

「慌てたところで何もかわらないからな。まあ今はあの二人が帰ってくるのを待とう」

しばらくしてナギの奴が帰ってきたんだが……

「……で お前は一昼夜アリカ王女殿下連れまわした挙句、その敵本拠地を壊滅させてきたのか!」

詠春におもいつきり説教されている。

「何のために秘密裏に調査してると思ってるんだ!」

「まあそれくらいにしたらどうだ、詠春。仕方がない状況だったんだ。俺でもきつとナギと同じ行動をするよ」

「しかしだな、ジョット。万が一アリカ王女殿下お怪我でもあったら……」

「姫さんノリノリだったぜー?楽しかったーとかって」

「嘘をつけッ どうせお前が「詠春さーん」ん?」

お、タカミチにゼクトが来た。

「あのコワイ冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリ・・あ
ナギさんにお礼を伝えてだそうです。確かに笑いましたよね？」

「うむ、驚いたのじゃ」

「．．．．．ッ」

「な、言った通りだろ？」

詠春の奴何も言えなくなってるし、アルの奴も後ろで忍び笑いして
やがる。

「それに．．ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

「な．．それは．．」

ナギは執政官の会話映像の証拠を持って法務官と会うことに。
アリカ姫は帝国第三皇女と接触しに行った。

第五話

俺とナギ、ジャック、ガトウの四人は法務官に会うためマクギル元老院議員に会いに来た。

「マクギル元老院議員」

「御苦労、証拠品はオリジナルかね？」

「ハ・・法務官はまだいらっしやいませんか」

「法務官は・・来られぬこととなった」

「・・・ハ・・？」

「あれから少し考えたのだがね・・せつかくの勝ち戦だ。ここに来て水を差すのもどうかと思ってね」

原作でも読んだから知っているが、神から与えられた超直感で確信に変わる。こいつは偽物だと・・・。

「ナギ、ジャック、ガトウ、戦闘準備だ」

「さすがだな、ジョット。お前も気づいたか」

「どうしたんだ、ナギ、ジョット？」

俺は軽くX BURNERを偽マクギル元老院議員の頭に放つ。
ポウン！

「な！？ジョット、おま・・・いきなり元老議員の頭を燃やして・・・」

「バカ、よく見てみなガトウ」

炎の中から現れたのは、白髪青年だった。

「・・・よくわかったね、千の呪文の男、炎の拳闘士。こんな簡単に見破られるとはもう少し研究が必要のようだ」

「いくら姿を変えても俺の持つ超直感の前では無駄なことだ」

「へえ、初めて聞く力だね。でも、残念ながら本物のマクギル元老院議員はメガロ湾の底だよ」

「てめえ！」

ナギが突っ込むが、奴の仲間と思われる炎を操る奴と水を操る奴に阻まれてしまう。

「強えぞ、奴ら！」

「だが生身の敵だ。政治家なんぞと比べりゃ、万倍！！戦いやすいぜ！！」

ジャックの奴、大剣なんか出してやる気満々だな。まあ久しぶりに骨のありそうな奴との戦闘だもんな。

「フ・・・」

あれは・・・通信機！？まずい！

「わしだ！マクギル議員だ。反逆者だ！スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーグ、ジョット、奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！今も狙われている！軍に連絡を・・・」

ちッ、これで俺も反逆者ってわけか。

「げっ」

「やられたな」

「君達は少しやりすぎた。悪いが退場してもらおう」

ゴオオオオ！

結局奴らには逃げられてしまった。

俺達もなんとか海に飛び込んで逃げ出したが・・・。

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。いいね、人生は波乱万丈でなくっちゃ」

「なんで嬉しそうなんだよ、ジャック」

「タカミチ君たちは逃げだせたかな」

「・・・姫さんがやべえな」

連合から追われる身となった俺達紅き翼は、囚われとなったアリカ姫を救うため、夜の迷宮に向かった。

「よお、来たぜ姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

どうやらアリカ姫は無事のような。

俺達はアリカ姫と一緒に囚われていた帝国の第三皇女テオドラを連れて紅き翼の隠れ家であるオリンポス山を目指した。

「何だ　これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんな所かと思えば・・・
掘立小屋ではないか」

「俺ら逃亡者になに期待してたんだよ、このジャリは」

「何だ、貴様無礼であろう」

「へっへ〜ん、生憎俺はヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

やれやれ、ガキみたいなやりとりだな。

「おいジャック、いくらなんでも失礼だぞ」

「そうは言ってもな、ジョット、事実だし」

「何、お主があゝの炎の拳闘士と有名なジョットか!？」

「有名って・・・そんなに有名なの、俺？」

「うむ、敵であろうと命までは取らないことから、情け深い武士のような男だな。反面、一部の者は戦争だというのに人を殺すこともできない軟弱者だといわれておるぞ」

軟弱者って・・・俺そんな風に思われてたんだ・・・
なんかシヨックorz

「他人の言うことなんて気にするなよ、ジョット」

ジャックに励まされるとは・・・俺ってホント、ダメな奴なのかな？

「妾もお主が軟弱者だとは思っておらぬぞ。戦争だというのに自分の信念を貫けるのじゃ。強い男じやと妾は思っておる」

そんな言葉に俺はうれしくなる。

「ありがとう、テオドラ皇女」

そう言って微笑むとテオドラ皇女は急に顔を真っ赤にした・・・。
なんだ？

「う、うむ。それと妾のことはテオと呼ぶがいい」

「わかったよ、テオ」

するとジャックの奴がむかつく笑みを浮かべてやがる……。なんだ？

「へえ、なるほどね。ませてんじゃねえか、このジャリガキ」

「黙れ！この筋肉達磨！」

すると二人で喧嘩し始めた。なんなんだ一体？・・・そんなやりとりをしている間にとうとうあの有名なシーンが始まった。

「世界全てが敵・・・良いではないか。こちらの兵はたったの八人じゃが最強の八人じゃ」

俺が加わることで原作では七人だったのが八人に変わっている。なんか不思議だ・・・。

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士 ナギよ、我が盾となり剣となれ」

「へ・・・相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう」

ここから俺達紅き翼の猛反撃が始まる。

第六話

紅き翼の猛反撃が始まったばかりのころ、俺は紅き翼のみんなを秘密基地に呼んでいる。理由は俺の能力をみんなに説明するためだ。

「というわけで、みんなが気になってた俺の炎について説明しようと思う」

「やつとか。随分待たせたじゃねえか、ジョット」

「すまない、説明する機会がなかったのな。では説明するぞ。人体には血液以外にも目に見えない生命エネルギーが波動となって駆け巡っているんだ。波動は七種類あって、リングはその波動を高密度エネルギーに変えて生成する。その高密度エネルギーを俺は死ぬ気の炎と呼んでいる」

「死ぬ気の炎って、なんかダセー名前だな。もうちょっとマシなのつけられなかったのか」

「お前だけには言われたくないよ、ジャック」

ジャックの技のネーミングもいまいちだからな。

「成程、大体わかりましたが、何故あなたはリングを複数つけているのですか？」

「それについては今から説明する。波動に種類があるようにリングにも同じく種類があつてな。波動とリング、この二つの種類……つまり属性がそろわないと死ぬ気の炎は生成できないんだ」

「それは人間なら誰でもその波動が流れておるのか？」

「もちろん。大抵の人間には複数の波動が流れていますが、一つの属性以外は微弱なものですよ」

「へえ。結構簡単なんだな」

「いや、簡単なんじゃないぞ。リングに炎を灯すには覚悟が必要になる」

「覚悟？」

「そうだ。口先だけではない本当の覚悟が必要なんだ」

俺は真剣じみた顔でそう言う。

「あの、話を折るようで悪いんですが、その属性っていうのはジヨットさんが使っていた匣にもあるんですか？」

「いい質問だ、タカミチ。タカミチが言うように、匣にも波動やリングのように属性があつてな。波動、リング、匣、この三つが合致しなくては匣は開匣できない。そして、属性は天候になぞらえていてな。大空・嵐・晴・雲・霧・雷・雨に分類される」

「それはわかったんだが、どうやって属性の見分けがつくんだ？」

「それは簡単だよガトウ。属性によって色が違うんだ。大空ならオレンジ・晴はイエロー・雨はブルー・雷はグリーン・嵐はレッド・雲はバイオレット・霧はインディゴにね。そして覚悟があるほど混

じり気の少ない純度の高い炎になるんだ。純粹な炎ほど属性の持つ特徴をより強く引き出すと言われている」

「特徴、ですか？」

「ああ、大空は調和・晴は活性・雨は鎮静・雷は硬化・嵐は分解・雲は増殖・霧は構築という風にね。ここまでで何か質問はあるか？」

周りを見渡すとナギが手を挙げている。

「何だ、ナギ？」

「死ぬ気の炎と属性についてはなんとかわかったけどよ、死ぬ気の炎を使った戦闘方法ってジョットが作った匣しかないのか？」

「いや、死ぬ気の炎は武器に灯すこともできるし、つい最近わかったことなんだが、魔法や気にも混ぜることができる」

そうなのだ。つい最近実験でわかったことなのだが、魔法や気にも混ぜて使うことができたのだ。試しに魔法の射手に雲属性の炎を混ぜてみると、たった一矢の魔法の射手が五十本以上に増殖したのだから驚いた。

「マジかよ！？なら、俺達もその死ぬ気の炎の使い方覚えれば、さらにパワーアップすることができるってことだよな！？」

「まあ、そういうことになるかな」

「ナギ、あなた、ただでさえチートなのに、さらに強くなるつもりですか？」

「だってよーアル、俺達はこれから完全なる世界と本格的に戦うことになるんだ。戦力アップはしとくに越したことねーぜ」

「確かにナギの言うとうりだな」

詠春がナギに同意する。

「決まりだな。ジョット、俺達にもリングを人数分作ってくれ」

「そう言うだろと思ってな、すでにみんなの分のリングは作り終えているよ」

取りだしたケースを開ける。リングのデザインはマーレリングの紅き翼Verにしようかと迷ったが、それだと狙いすぎてると思うし、何よりガトウとタカミチの居合い拳の邪魔になるかと思ったので、デザインはシンプルに原型のボンゴリングVerにしておいた。

「『『『おお』』』」

ナギ、ジャック、タカミチが感嘆とした声をあげた。

「じゃあ、リングをみんなに配る前に、各自の属性を確認しようか」

「そついや、どうやってたら誰に何の属性が流れているかわかるんだよ?」

「それはこのリングを使う。こいつははめると、はめた持ち主の一番強い波動によって宝石の色が変わるんだ。その属性の色にな。そのかわり、こいつには炎を灯す力はないがな」

そう、誰がどの属性かわからないので、このリングを作ったのだ。
作るのにめっちゃ苦労したかな。

そう考えているうちに、全員にリングがいきわたったようだ。結果は

ナギ 大空

ジャック 嵐

詠春 雨

アル 霧

ゼクト 雲

ガトウ 雷

タカミチ 晴

となった。まあ、大体予想どおりだな。そして皆がリングをはめる
のだが……。タカミチ以外の全員が一発でリングに炎を灯した。
これには驚いた。すぐにできるとは思ったが、一発とは……。
それだけみんなの覚悟が本物だったことだな。タカミチ以外は。あ
っ、タカミチ涙目だ。やれやれ、しょうがないな。

「タカミチ」

「ジョットさん。僕だけ炎が灯りません。やはり僕は何をやっても
落ちこぼれ何でしょうか」

そう言ってますます落ち込むタカミチ。まったく。

「タカミチ、リングに炎を灯すために必要なのは才能なんかじゃない。覚悟だ。お前には覚悟たりないんだ」

「覚悟なら僕にだってあります！」

「なら、お前にとって覚悟とはなんだ？」

「それは、早く強くなって、みなさんの力になるために・・・」

「本当にそれがお前の覚悟か？」

「えっ？」

タカミチはきょとした顔をするが、俺は話を続ける。

「お前にとっての覚悟は俺達のためなのかと聞いているんだ」

「それは・・・」

「お前は力をつけたら、その力を何のために使いたいんだ？俺達を守るためじゃないだろう？」

「僕は・・・力をつけたら、力のない弱い人たちを守るために使いたいです」

「いい答えだ。今は違うのか？」

「今も昔も変わりません！」

そう言った瞬間……タカミチのリングから炎が灯った。

「！……これは……」

「やったじゃないか。まだまだ純度が低いが、十分だろう」

「ジョットさん！僕……」

「炎を灯せた褒美だ。こいつをお前にやろう」

「これは……匣！？いいんですか!？」

「いつか強くなつて、そいつを使いこなせるようになったら、俺と勝負をしよう。そして、またお前の覚悟を俺に見してくれ」

「はい！」

そう言つてタカミチは嬉しそうに去つていった。

「やれやれ、ジョットには頭が上がらないな。普通、弟子が壁に止まっている時に手助けするのは師匠である俺の役目なんだが……師匠失格かな？」

「そんなことないさ、ガトウ。今回はたまたま俺が気づいてやれたが、ガトウにだって同じことはできたはずだよ」

「そう言つてくれると助かるよ」

そう言つて俺達は笑いあふ。

あの後、紅き翼のみんなに炎を武器に灯すやり方、魔法と気を炎と混ぜるやり方を教え込んだ。
結果、みんなものすごく強くなった。

第七話

死ぬ気の炎の説明から6か月、ジャック曰く映画なら3部作、単行本なあ14巻分くらいの死闘の後、遂に奴らの本拠地を突き止め、追いつめる。

世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」だ。

「不気味なくら静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「案外、降伏の白旗を作るのに忙しいのかもな」

「「違いねえ」」

俺の冗談にナギとジャックが笑って返す。

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混成部隊準備完了しました」

「おう。あんたらがジョットと一緒に外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

そうなのだ。俺は今回紅き翼のみんなに頼んで外での戦闘を望んだのだ。ナギ達と一緒に本丸に突入してもいいが、原作通りだと、数があわなくて俺一人だけあぶれるので、外で召喚魔たちを倒してからナギ達に合流することにしたのだ。

「ハッ。それで、あの・・・ナギ殿、ジョット殿」

「ん？」

「なんだ？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

「……原作じゃナギだけだったのに俺もかよ。」

「おお？いいぜそれくらい。なあジョット」

「ああ、俺も別にかまわないよ」

そう言つて俺は色紙にサインを書く。

「そ、尊敬してました」

ウハハハとジャックが笑つてやがる。まったく……。そんな時、ガトウから連絡が来た。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

やれやれ、やっぱりか。連合の奴らには反吐がでるな。

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らは始めています……。世界を無に帰す儀式を。世界の

鍵、黄昏の姫御子は今彼らの手にあるのです」

「ああ・・・よおしつ、野郎共・・・行くぜ!!」

最終決戦が始まる。

side out

side セラス

私は今、あの勇名な紅き翼の面々と共にいる。これから、紅き翼の一人ジョット殿と共に彼らが本丸に突入できるように外の召喚魔たちを抑えるためだ。

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混成部隊準備完了しました」

「おう。あんたらがジョットと一緒に外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ。それで、あの・・・ナギ殿、ジョット殿」

「ん？」

「なんだ？」

こんな機会は二度とないんだ。勇気を振り絞って・・・

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

かんじゃった。……は、恥ずかしい。

「おお？いいぜそれくらい。なあジヨット」

「ああ、俺も別にかまわないよ」

そう言つて二人が色紙にサインを書いてくれます。一生の宝物にしようとした私でした。

そんな時、ガトウ殿から連絡がはいって何やら話しこんでいます。ここからだと遠くて聞こえません。

「ああ……よしつ、野郎共、行くぜ！！」

ナギ殿の合図と共に戦いが始まります。

s i d e o u t

s i d e ジョット

さて、俺は召喚魔たちを前にいるのだが、かなりの数だ。面倒なので……

「出てこい、動物匣達」

俺は持っている動物匣を全て開匣する。

「セラス、俺はこのままナギと合流する。動物達をここに置いて行くから後は頼んだぞ！」

「はい、わかりました！」

そう言っただけで俺はナギ達に合流するため一直線に向かうわけだが、召喚魔達が邪魔をする。面倒くせえ。

「出てこい、ナッツ」

「ガオ」

俺はリングからナッツを呼び出す。そして

「ナッツ、天空の雄叫びだ」

「G A O O O O O O O O ! ! !」

ナッツの雄叫びによって、召喚魔達が石化していく。完全に石化して、破壊してもいいのだが、俺は炎を温存するためにそのまま無視して進む。間に合えばいいのだが……。

ナギ達に合流すると、ちょうどナギがフェイトの首を掴んでいるところだった。まずい、この後は

「ナギ、気をつけろ！」

「ジョット?…ぐはっ」

ナギの腹が敵の攻撃によって貫かれた。

「くそっ、全員俺の後ろに下がれ！」

俺はナギをかばうように前へ出て全ての炎を込めたマントを全開する。しかし

「なっ！？防ぎきれないだも！？」

徐々にマントを突き破って攻撃が届いてくる。そして完全にマントが破られ攻撃が直撃した時、俺は意識を失った。

「こいつは……………」

俺は目が覚める。知らぬベッドで寝ていたようだ。俺は起き上がるうとするが膝に何かが乗っていることに気づく。何かと思ったらそれは、テオの頭だった。

「何をやってるんだ、こいつは？」

「感謝して下さいよ。あなたが寝ていた丸一日、ずっと看病してくれていたのですから」

「アル……。俺は丸一日も寝ていたのか」

「ええ、我々のなかでも一番の重傷者だったのですよ、あなたは」

「戦いはどうなった？」

「ナギが勝ちました。しかし、ゼクトが逝かれました……」

「……そうか」

結局原作通りになってしまったか。

「では、わたしはこれで」

アルが退出した後、ナギが部屋に入ってきた。

「よおジョット！目え覚ましたんだってな！」

「静かにしろ、ナギ。目を覚ましてしまっただろう」

ナギに注意するが、遅かったようだ。

「……うつむ。ジョット！？目を覚ましたのか！？どこか痛いところはないか？」

「大丈夫だよ、テオ。アルから聞いたよ、俺が寝ている間、ずっと看病してくれてたんだってな。ありがとう」

俺はテオに笑いながら頭をなでる。するとテオの顔がみるみる真っ赤に染まっていく。……なんだ？

「どうした、テオ。お前、俺を看病してたせいで体調がよくないんじゃない・・・」

「な、なんでもないのじゃ。気にするでない」

そう言つて俯くテオ。何なんだ一体・・・？

「あゝ、いちゃついているとこ悪いが、これから式典に出るぞ、ジヨット」

「誰もいちゃついてなどおらぬわ！」

すごい形相でテオが怒鳴るが・・・

「式典？」

「ああ、ほら行くぜ、ジヨット」

俺はナギに無理やり引つ張りだされ、式典に参加させられる。病み上がりだつてのに。

その後、酒場でみんなと飲んでいるのだが・・・

「アル、お前なんで式典に参加しなかった？」

「私、上がり症なもので」

「「嘘つけ」「

思わずナギとはもってしまふ。

「まさか、あのゼクト殿が逝ってしまわれるとは・・・」

「なー？あの妖怪じじい、殺しても死なねえ気がしてたんだが。まあ戦争だしよ、他にも大勢死んだ。・・・死んだ奴らと世界平和に」

そう言つて杯をかけるジャック。さて、俺もそろそろ行こうかね。俺は誰にも気づかれないうちにそつと裏口から出ようとするが

「行つてしまわれるのですか？」

「アル！気づいてたのか？」

「ええ、勘のいいあなたのことですから、気づくかと。それに気付いたらほつとけない人ですからね、あなたは」

「止めるか？」

「いえ、止めませんよ。しかし、気をつけてください。くれぐれも無茶はしないように」

「ああ、ありがとう、アル。じゃあ行つてくる」

俺は超死ぬ気モードになつて目的地に向かつて飛んだ。

第八話

オスティアは崩壊し、混乱の極みにいた。

「くそ、なんでだ、飛ばねえぞ」

「ホウキはだめだ。港への避難勧告が出てる」

「皆さんこちらへ！お守りします」

「あんたらは！？」

「MM重装兵団の者です。一人残さず助けろとの厳命です」

「どういふことなんだ！？戦争は終わったんじゃないのか！？」

「ハッ、確かに戦争は終わりました。しかし……この都は……まもなく滅びます」

俺は今、オスティアの貧民島上空にいる。来た理由はもちろん、一人でも多くの命を救うためだ。偽善なのかもしれないが、それでも俺は人命を救うためにここに来た。

「出てこい、瓜」

「ニャアア」

俺は嵐のV Gを出す。ちなみに、瓜は獄寺と違って俺になついている。

「瓜、形態変化だ」

「ニャアアア！」

俺は嵐のV Gのロケットボムで市民に落ちてくる落岩を粉碎する。

「あなたは、ジョット様！？」

「ここは、危険だ。急いで避難しろ」

「はい、ありがとうございます！」

急いで避難する市民を横目に、俺は次々と落岩を粉碎する。同じ作業を繰り返していると

「お主、何をしている！」

突如、念話が入ってくる。この声・・・アリカ姫か。

「何って、見てわからないのか。救助活動だよ」

「そうではなくて、何故お主がここにおるのだ」

「何となく予想はできてたんでね。勝手にやらせてもらっているよ」
そう言っただけは話を終わらせようとするのだが

「ゴルアーツ！！アリカ、それにジョット！どついつこつた、コレは！？」

この声はナギか。やれやれ。

「見ての通りだ。世界を救う代償に自らの国を滅ぼした。案ずるな。妾もいずれ地獄へおちる」

「何で話さなかったてめえら！今からそっちに向かう！まってる！」

「戦いしか能のない男が一人で何の役に立つ」

「それにお前、魔法が満足に使えないだろ。来ても足手纏いだよ」

俺とアリカ姫の二人のもの言いに、ナギは言い返せなくなる。

「うつ……。だが、死ぬ気の炎は使えるんだろ？それで……」

「お前、死ぬ気の炎単体の使い方なんて知らないだろうが」

俺が呆れて言っ

「なら、ジョットが作った匣兵器を貸してくれ。それを使えば……」
「

「その場凌ぎの戦力なんて役に立つかよ。そんなことよりナギ、前はまだ崩落していない地区を頼む。じゃあ、任せたぞ」

俺はそう言って無理やり念話を終わらせる。さて、救助活動を再開しますか。

犠牲者の数は、俺が介入したせいかな、原作よりも少ない1%を下回った。しかし、それでも多くの人死んだ。俺はその後、紅き翼の皆に合流し、ほぼ全員にボコボコに殴られた。アリカ姫は、父王を殺し、自らの国を滅ぼしたことで、災厄の女王と呼ばれ、2年後の処刑が決定した。

2年後、アリカ姫処刑当日

魔獣うごめくケルベラス溪谷にて処刑は行われた。

「古き残酷な処刑法ですが・・・この残酷さをもってようやく魔法世界全土の民も溜飲を下げることとなりました」

元老院の奴らめ。相変わらずむかつく奴らだ。まあ、すぐに痛い目みるがな。

アリカ姫は何の抵抗もなく溪谷へと身を投げた。

「よろし「よぉーし、こんなもんだろっ」な！」

ジャックめ。気の早い奴だ。

「録れたか？ちゃんと録れたか？よぉーし御苦労。おーいおっさん。これ生中継とかじゃないよな？」

「無礼者！何者だ、貴様名を・・・」

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは「なかった」ことになる。わかるな？」

「きつ貴様は・・・」

「ヌン！」

纏ってる鎧内側から壊しやがったよ、あいつ。どんな体の構造してるんだ？

「千の刃の・・・ジジャ・・・ジャック・ラカンー！！？」

「ぬふ~~~~~ん」

不敵な笑みを浮かべて登場しやがった。まったく。
ザッ

「青山・・・詠春！！！」

ふわり・・

「アルビレオ・イマ!!」

ズシャッ

「ガ・・ガトウ!!」

そして

「ジョット!!」

俺の登場でさらに周りが騒がしくなる。

「紅き翼・・馬鹿なツ・・では谷底の王女は・・」

「今頃王子様に助けられてるんじゃないか？」

俺がうすら笑いを浮かべてこたえる。

「バカなツ・・千の呪文の男とはいえあの谷底から生きては・・」

「それはどうかな？魔力も気使えないくらいで奴が死ぬかよ」

俺もジャックの意見に同感だな。

「ぐ・・捕えよ、反逆者だ!!谷底の二人も逃すな!!」

「おおっと、やるのか？いいのかよその程度の戦力で」

「フフ・・・その程度の戦力だと？愚か者が。このイベントの警備はここに見えるだけではない。周囲数十キロ二個艦隊と三千名の精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでもこれを・・・」

やれやれ、わかってないな。

「だからその程度の戦力でいいのかって聞いてんだよ」

「なっ何！？」

その言葉を合図に俺達は暴れだす。
ちなみに俺は

「X BURNER！」

で艦隊や兵士たちを吹き飛ばした。ジャックに少し残しとけと言われたが、俺は無視した。

結果、十分もたたないうちに全ては終わった。そして・・・

「ここが京都か」

俺達紅き翼はナギが予てから言っていた、京都に来ている。

「しかし、しみったれたところだな」

「趣があると言えよジャック。詠春、案内頼むぞ」

「ああ、任せてくれ」

俺達は色々と京都を観光めぐりしていると、裾を引っ張られた。見
てみるとアスナちゃんが

「お腹すいた」

と言ってきた。

「詠春、詠春の実家まであとのくらいだ？」

「あと、もう少しだ。だが、夕飯までは着いてから一時間はあるぞ」

「一時間か……。アスナちゃん、それまで我慢できる？」

こくつとうなずく。

「そうか、えらいな」

俺はアスナちゃんの頭を撫でていると

「しかし、テオドラ皇女といい……。ジヨットはひょっとしてロリ
コンなのでは？」

「ぶっ飛ばすぞ、アル。あんな子供、恋愛対象外だ」

そう言うのアスナちゃんの機嫌が少しわるくなる。……。なんだ？
アルの奴も

「二人共可哀そうに……」

とか呟いてるし。俺にはさっぱりわからん。

そして詠春の実家に着いて、酒盛りしていると

「詠春、なんだこいつ？」

そう、見上げるぐらいでかい物体が俺の目の前にいた。

「こいつはリヨウメンスクナノカミといって、千六百年前に封印されていた飛騨の大鬼神だ」

「なんで封印が解けているんだ？」

「おそらく、封印の限界を超えたんだと。千六百年も前ですしね」

アルがそうこたえるが、俺はこいつに同情しかできなかった。俺達がいるときに封印が解けるとは、なんて運のない奴。

「じゃあ、俺が奴を凍らせるから、その間にナギとジャックで粉々にしてくれ」

「わかったぜ、ジョット」

「酔い覚ましには丁度いい。暴れるか」

そして俺は奴の目の前まで飛んでゆき

「死ぬ気の零地点突破 初代エディション」

で凍らせる。

「さすがだな、ジヨット。くらえ、『千の雷』!!」

「俺も続けぜ。『斬艦剣』!!」

二人のでたらめな攻撃でスクナは粉々になり、また封印されることとなった。

翌朝、俺達紅き翼は全員で写真を撮り、その後解散となった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4166s/>

炎の魔法使い

2011年5月11日22時12分発行